

海外教育研修で学んだこと —韓国における音楽教育の調査を中心に—

片山 侑美

(授業力高度化コース第5期生)

1. はじめに

本論文は、京都教育大学大学院連合教職実践研究科が主催する海外教育研修プログラムにおいて、韓国の初等教育学校を見学したことを中心に述べることにする。

2013年度の研修は、9月23日から30日までの8日間、韓国で行われた。韓国へは2000年に引き続き2回目の訪問となる。

私は、韓国の教育における音楽科の位置づけはどのように行われているのかが気になり、このテーマを設定した。

2. 春川教育大学校について

今回の研修の拠点、春川教育大学校は小学校教員を養成するための大学であり、京都教育大学との交流を盛んに行っている。大学の規模は京都教育大学と同じくらいで、緑が多く単科大学としてはとても広い敷地をもった綺麗な大学であった。

春川教育大学では、幸いにも私の「韓国の音楽教育に関して学びたい」という想いが届いたのか、初等音楽教育の講義を聴講する機会をいただいた。

これは「チャンゴ」と呼ばれる、韓国の伝統的な楽器を使った授業の様子である。春川教育大学の学



「チャンゴ」を使った初等音楽の講義

生は全員がこの講義で チャンゴの演奏の仕方を学ぶことになっているそうだ。調べてみると、韓国では日本と同じようにピアノ等の西洋音楽の文化も発達しているが、幼い頃から民族楽器に触れる機会も多いようだ。

この講義では、小学校教員を目指す学生が将来自国の音楽文化を教えることを目的としているように感じ 韓国の伝統文化を大切に継承していこうとしている姿が印象に残っている。

3. 韓国の初等音楽教育における調査

韓国研修では春川教育大学附属初等学校と昭陽初等学校との2校を訪問する機会を得られた。

3-1. 春川教育大学附属初等学校について

春川教育大学附属小学校に着くと、最初にホールで私たちの歓迎セレモニーが開かれた。セレモニーでは児童がクラブ活動や課外活動の成果である歌や演奏を盛大に披露してくれ、音楽教育のレベルの高さ、また個性を大切にしている教育がなされている成果であると実感した。



セレモニーでチマチョゴリを着てカヤグムを演奏する韓国の小学生

春川教育大学附属初等学校では、音楽系のクラブ活動の見学をする機会が得られた。合唱・リコーダー・オーケストラ・チャンゴの4種類であり、初等学校にしてはたくさんの種類があるなという印象であった。見学した日は、午前中授業で昼休みを挟んで、午後からクラブ活動が始まった。日本の小学校におけるクラブ活動は週1回程度であることを考えると、かなり力を入れていることが伺える。

また、特色のある取り組みの一つとして、昼休みにホールを使って、ダンスやオカリナなど、それぞれが課外活動で取り組んでいる特技を自主的に発表し合う場が設けられていました。

自分の得意なことを発表し合う場があることで自然と個性を尊重し合うことの大切さを学べる環境があるように感じた。



オーケストラ部の練習の様子



チャンゴ部の様子

3-2. 昭陽初等学校について

3-2-1. 学校概要について

学校に着くと、校長先生から学校概要の説明があった。学校目標は日本語で「分かち合いのある暖かい学校」と訳されており、具体的には一つの輪になるための多文化教育の強化を目指しているようだ。学校説明のスライドは、日本語で用意されており、韓国の人の思いやりを感じた。また、日本と同じように教育目標を作り、その実現に向けて様々な取組をして特色ある学校作りをしていることを理解した。例えば、フルーツや魔術、ブロック教室など15の技能特性プログラムがあり、児童の興味や関心に応じて選択できるようになっていた。

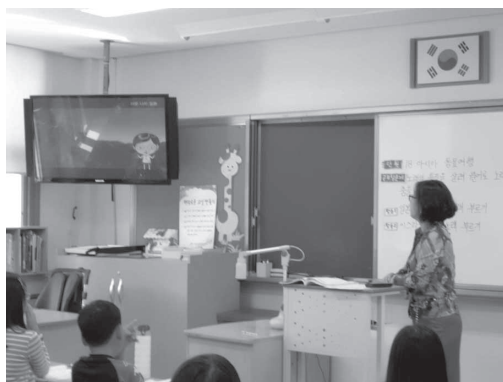


3-2-2. 授業の見学

学校概要の説明の後には、3年生の音楽科の授業を見学させていただいた。

まず教室に入って驚いたことが、写真にもあるようにどの学級にも黒板の上には韓国の国旗が掲げられていたことである。

授業の内容は「アジアの童謡旅行」という題目で、アジア地域の歌を言語で歌う表現活動であった。今回の授業では世界の歌を取り上げていた。研修に行く前に韓国の初等音楽のカリキュラムについて調べたところ、4～5年前まで普通の歌曲や世界の歌の割合を7とすると、残る3の割合で伝統音楽の学習をしていたが、最近になって、伝統音楽の割合が増えたということがあった。それでもやはり、世界の歌は重要な単元として、今もなお受け継がれていることが伺えた。



が伺えた。

また、日本の初等音楽教育において、外国の曲を原語で歌うことは到底ありえない。自国の文化を大切にしつつ他国の文化を学んでいる姿勢から、学校の教育目標である「一つの輪になるための多文化の

授業の中で子どもたちは原語を使って世界の歌を斉唱していた。日本の「さくら」も歌われていた。情景を思い浮かべられるように、日本の説明がなされているDVD教材を視聴し、自らが思う「さくら」を歌に合わせて体いっぱい表現する子どもたちを見ると、とても楽しそうに授業に参加しているように思えた。教科書の中には、曲に合わせてその国の国旗や挿絵が描かれていた。音楽科の単元であったものの、社会科や外国語といった内容が取り入れられていることから、韓国の小学校でも合科的な学習が実施されていることが伺えた。

強化」の一端を垣間見られたように感じた。

3-2-3. 実地授業について

昭陽初等学校では3年生に実地授業を行う機会をいただきました。あやとりやふくわらい、影絵など日本の伝統的な遊びを中心に授業を組み立て、子どもと一緒にいった。

韓国語で授業を行うために、準備はとても大変であったが、子どもの興味を引き付けるための手立ては、国境を越えても共通であることを学んだ。また私たちが教団に立つと、韓国の先生に向ける姿と同じように一生懸命キラキラとした目で楽しそうに授業を受けてくれ、子どもたちの学ぶ意欲の高さを感じられた。



4. 終わりに - 教師を目指す学生との交流 -



今回の研修では、私たち一人ひとりに春川教育大学の学生がバディとして付き、観光案内や生活面でのサポートをしてくれるという体制をとっていた。何から何までバディにお世話になったといっても過言ではない研修となった。バディとは英語でコミュニケーションをとらなければならなかったが、韓国の学生の英語力はとても高く、国際化を意識した韓国の教育の成果に刺激を受けた。今回の研修では、そのバ

ディと一緒に文化研修として、南怡島や韓国の首都ソウル、また世界遺産や文化遺産にも訪れた。文化研修を通してたくさんの世界遺産を始めとする韓国の歴史に触れ、改めて日本の文化を見つめなおす機会を得ることができたと思う。

今回の研修をふり返って事前に設定されていた三つの研修の目的を達成することができたのではないかと考えている。

研修の目的は以下の通りである。

- ①現地の教職を目指す学生との交流
- ②現地の学校での参加観察・実地授業
- ③国際的な教職専門職者としての自信と自覚を身に付ける

まず①に関して、現地の教職を目指す学生との交流を通して、心と心の交流の大切さを実感した。「韓国と日本の国同士の問題は難しく、私たちにはわからないことも多いけれど、若い世代が心と心の交流を行うことで何か変わるかもしれないね」研修中最も印象に残っている私のバディの言葉である。この言葉のように、絆の輪を少しずつ構築していくことが、国際交流を行う上で一番大切なことなのでは

ないかと実感した。

次に②に関して現地の学校での参加観察や実地授業を通して、韓国の教育に対する熱意を感じることができたと思う。韓国の児童は学ぶ意欲がとても高く、教員は毎日の研修を大切にし、学び続ける姿勢を貫いていたように感じた。

そして③に関して韓国の教育に対する熱心さを実際に目にし、肌で感じたことで 自身の4月から教壇へ立つことに向けてのモチベーションになったのではないかと考えている。

終わりに、今回の研修ではバディと対面してからほぼ毎日大学周辺を案内してもらい、いろんな話をした。それはたわいもない話であったり、同じ教職を目指す者としての将来の話であったり、とても短い期間ではあったが、今まで経験したことのないくらい濃い時間となった。初めて海外に友人と呼ぶことのできる存在をもつことができたことは、今後生きていく上で辛いことがあったとしても乗り越えていくための勇気になり、一生の宝になったと実感している。

今回この研修を企画、そして引率してくださった、佐々木先生、井上先生には、ここまで感じることでできた研修を提供してくださり、本当に感謝しています。ありがとうございました。



主要参考文献・URL

1) 日本・中国・韓国の教師による座談会

「中国・韓国の音楽教育の実践を訊く－横浜山手中華学校と東京韓国学校の参観を終えて－」

http://www.kyogei.co.jp/data_room/kaze/pdf/vent20_2.pdf

2) 関根明伸・池田延行：韓国初等学校体育科における国家水準カリキュラム研究（2011）

https://kiss.kokushikan.ac.jp/pages/contents/0/data/1003919/0000/registFile/0389_2247_030_12.pdf

3) 長町充家：『韓国の小学校1－2年生の「楽しい生活」』

http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/7664/1/kyokyr_2_031.pdf